
もう一つの大空

真菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一つの大空

【Nコード】

N9092Y

【作者名】

真菜

【あらすじ】

成績優秀スポーツ万能の市。そんな彼女の元に突然現れたリポーン。彼との出会いが運命を大きく変える！ セッタンセッテの読みきりを読んでいたとき、ツナに姉がいたと知って、成績が優秀だった（らしい）姉がボスだったらどうなるんだろーなーという考えから作りました。

標的1 リボーン来る！

「市！そっちに行ったよ！」

「OK！」

スパアン

「やったーっ！」

アタシは沢田市。

並盛中学に通う中学二年生。

自分で言うのもなんだけど、勉強にスポーツ、何をとっても指折りの学校トップクラスの成績を誇る。

コートを片付けると、アタシは彼の元へと駆けていった。

「恭ちゃんっ！や・く・そ・く♪」

「ハア。分かったよ。買えばいいんでしょ、ケーキ」

彼は我が並中の象徴ともいえる、風紀委員長の雲雀恭弥。

年齢不詳でアタシが入学したときには既に風紀委員長の座についていた強者。

アタシはそんな彼の元で風紀委員長補佐と言う役職についている。

おかげで彼と仲良くなることができたし、部活の試合のたびにご褒美を買ってくれる。

「但し、一つだけね」

けど、頑固なのがたまにキズ。

「え〜」

「そんな態度を取るなら、次から買ってあげないよ」

「ゴメンチャイツ★」

「買ってあげない」

「すいませんっした！」

「……言葉には気をつけなよ」

それだけ言うと、恭ちゃんは体育館から出て行った。

あゝケーキのためとはいえ、頭下げちゃったな。

ま、いっか★

よし、家に帰ろう。



歩くこと二十分。

そこにアタシの家がある。

「ただいまーっ」

「イッちゃんお帰り。帰ってきて早速なんだけど」

「分かってるって。ツナの勉強でしょ？」

バツが悪そうな顔をする母さん。

アタシには弟がいる。

アタシとは正反対で、勉強もスポーツも何をやらせてもダメダメで、学校で指折りのトップクラスの頭の悪さを誇る。

いや、誇っちゃダメだけど。

皆は彼をダメツナと呼ぶ。

「いいじゃない母さん。今がダメな分、将来が楽しみでしょ」

アタシだって始めから何でもできたわけじゃない。

人は努力次第で変われることをツナに教えたくて、アタシは自らツナの家庭教師を進んで受けた。

コンコン

「ツナ？ 入るよ」

ガチャッ

「わっ姉さん！？勝手に入らないでよ！」

「いま、ノックと断りを入れたからね？」

散らかった部屋に寝転がり、ひたすらゲームをやる弟。

あたしは呆れながらも部屋の片づけを始める。

「ほうら、ツナもさっさと片付けなさい。勉強やるわよ」

「またー！？どうせ何やったってダメツナなんだからほっといてくれよ！」

「ツナ！」

文句を言うツナに思わず声を荒げてしまう。

「ツナ、最初から何でもできる人なんて一人もない。アタシだって昔はツナみたいにダメダメだったんだから」

「え？姉さんが？」

「人は変われる”。アタシはそう信じてる」

「……ごめん」

「分かればいいのよ」

アタシはツナの頭をクシャクシャと撫でた。

そして机にノートと教科書を広げる。

「さ、始めましょ」



涼を求めるために大きく開け放たれた窓から聞こえるスズメの声で目が覚めた。

ツナの部屋。

どうやら勉強したまま眠ったらしい。

ツナはベッドですやすやと寝ていた。

アタシはツナを起こさないようにそつと部屋を出ると、自分の部屋に戻った。

まだ朝早い。

二度寝しても大丈夫そうね。

「おやすみ」

誰かに言ったわけではなかった。

だから、返事が返ってきたとき、心臓が止まるかと思った。

黒いボルサリーノに黒いスーツ。

黄色のおしゃぶりを持ち、ボルサリーノにはカメレオンを乗せた赤ちゃん。

「……………」

「ちゃオッス。お前が沢田市だな」

「……………」

「少し早く来ちまったが問題ねーな」

「……………」

「黙ってないで何かいったらどうだ？」

「……………きゃあああああああ！！！！」

結論。悲鳴を上げる。

だってそうすればツナか母さんがおきるでしょ？

……現実そう甘くないね。

どうして誰もおきてくれないのかしら。

拳句の果てに赤ちゃんに銃を突きつけられた。

「ア、アハハ……。危ないなあ、そんな物騒なものは赤ちゃんが持つてはいけないのよ？」

と言うよりここは日本だけだね。

銃を近づけられて両手を挙げる。

……ってコレおもちゃじゃん！

「うゝむ。このアタシがおもちゃで脅されるとは……」

そう呟くと赤ちゃんは小さく反応した。

「よくおもちゃって気付いたな。よし、合格だ」

「合格……って何が？」

「オレはお前の家庭教師としてきた、リボンだ」

「ボク、ちょっと待ってってね？」

手早く携帯を取り出して番号を押す。

そして呼び出し音になる。

ガチャッ

『もしもし』

「もしもし、警察ですか？」

ズガン

一瞬だった。

ほんの一瞬のうちにアタシの形態は粉々に打ち砕かれた。

『イツちゃん、どうしたの？今、変な音が聞こえたけど』

今頃か！今の音で起きたのか母さん！

鈍感すぎるぞ！

部屋を飛び出て母さんの元へ行く。

「母さんどういことよ！アタシの部屋に家庭教師を名乗る変な赤ちゃんがいるんだけど！！」

「家庭教師？」

あれ？と言う顔をする母さん。

もしかして母さんの仕業じゃない？

ってことはやっぱりあの赤ちゃんは不法侵入で……

「まあ早いわね。昨日の夜に電話したのに……あらイツちゃん。母さんをどこに連れて行くの？」

「外」

母さんの手を引っ張って外に出る。

一体何なのよこの母親は！

天然で自分の行動に悪気は一切ない。

この人には誰も勝てないわね。

「どういふことか説明して頂戴」

「ほら、市も来年は受験生でしょ？今の子達は一年生から勉強してるって言うし、市はツナの面倒も見てくれるから、自分の勉強を怠ってないか心配なのよ。そしたら昨日の夕刊に面白いチラシが入

ってたの」

「見せて」

差し出されたチラシをひったくるように取る。

なになに……

“お子様を次世代のニューリーダーに育てます。学年・教科を問わず。 リボーン”

怪しすぎるでしょ！

「そもそもアタシに家庭教師なんて要らないわ。三年になったら塾にいけばいい話でしょ！？」

溜息をつきながらも一度チラシに目を落とす。

あれ？リボーン？確かさっきの赤ちゃんの名前も……

まさかのマジな話！？

「ハア。今度からこーゆー話は本人に相談してからにしてほしいわ」

乱暴にドアを閉めて自分の部屋に戻った。

案の定、リボーンが待っていた。

「話は終わったか？」

「ええ。一応あなたが家庭教師ってことは信じてあげるわ」

「随分と上から目線だな」

だって年上なもの。

「それで一体何者なの？ただの家庭教師なわけはないわよね？」

「流石だな」

何でだろう。

いちいち馬鹿にされてる気がする。

「教えてやる。オレの本当の仕事は、お前をマフィアのボスにすることだ」

「へーふーん……って、ええええ!!?!?!?」

「オレはある男から、お前を立派なボスに教育するように依頼されてんだ」

その人のところに抗議に行きたい気分だわ。

「やり方はオレに任されている。一発撃つとくか?」

そういうとライフルをアタシに向けてきた。

「ちよっ何する気!?!」

「でも今じゃない」

そのときだった。

ぐるるる

リボーンのお腹がなった。

「あばよ」

風のように現れて、風のように去って行ったりボーンだった。

部屋には時計の音だけが響いている。

時計の音が……………

「きゃあああああ!!」

不覚にも本日二度目の悲鳴。

「母さん!食パン一枚頂戴!遅刻する!恭ちゃんに咬み殺される!」

慌てて家を飛び出す。

恭ちゃんに約束された“風紀委員登校時間”まで、あと五分。

アタシじゃどうがんばっても十分はかかる。

「オレが手伝ってやろうか？」

チャキという音と共に聞こえてきたりポーンの声。

見ると、塀の上にラジコンのような物に乗ってついてくるりポーン
の姿があった。

「銃を手にして何を手伝うって言うのよ！」

「お前を殺すだけだ」

「さらば！」

“殺す”というワードが聞こえてきた瞬間に全力ダッシュ。

殺されてたまるもんですかっ

何とか撒いたかな？と思ったら、今度は小さなバイクに乗って追いついてきた。

銃をアタシに向けて。

「嫌ああああっ!!」

速すぎるよ！バイクなんて卑怯だよ～～～!!

これこそまさに「リアル鬼ごっこだぞ」……って

「台詞を取らないでよ!」

「よそ見していると撃つぞ」

「なんでこーなるのよー!!」

そのままアタシは、リボーンと言う名の恐怖を後ろに見ながら学校へと走っていった。

標的2 死ぬ気弾来る！

「はあ…はあ…。何とか間に合った」

自己新記録三分。

リボーンのおかげ？

いやいや、アレは単純に人としての根性でしょ。

いわば鍛冶場の馬鹿力、的な？

「アタシは…佐藤じゃ…ない…っての…」

「佐藤がどうしたの？」

「きょ…恭ちゃん。ううん、何でもない」

いつの間にいたの？

声が聞こえたとき、リボンかと思って心臓が止まりかけましてよ？

「君がなかなか来ないから咬み殺しに行こうかと思ってたところだよ」

遅刻しなくてよかったと心のそこから思う。

「今日も仕事が溜まってから、早く書類持ってってね」

「了解」

風紀委員の仕事は、基本的に教室でこなしている。

今現在、委员会は部活と違って専用の部屋がない。

恭ちゃんが造ってくれればいい話なんだけどそんなことをいってる暇もないから、私は教室で仕事をしている。

因みに、恭ちゃん曰く、授業よりも仕事を最優先しろ。

絶対におかしいわよね？

いつもそう思いながら書類を手に教室へ向かう。

途中で友達と会い、喋りながら歩く、その時だった。

ザワザワ

「なんだか外が騒がしいわね」

「そうだね。あれっ？誰か走ってくるよ」

言われて窓の外を見ると、地平線の彼方（笑）から走ってくる人影があった。

パンツ一丁で一心不乱（？）に走っている。

あゝ変態がいる。

あゝ風紀が乱れる。

「あれって、市の弟じゃない？」

「え!？」

あろうことか、その変態はアタシの弟・ツナだった。

「知りませぬっ! ワタクシ私はあのような変態は存じませぬわっ!」

全力ダッシュでその場から逃げる。

後ろからの友の目が痛いけれど、気にしませんわっ!



「最悪だわ……………」

何なの…………何をしているのよツナは。

これじゃあアタシのメンツがガタ落ちじゃない！

イライラしながら書類を整理する。

「ツナの……バカ……」

「ツナは悪くねーぞ」

この声…。

振り返ると、窓枠にリボーンが立っていた。

思わずその胸倉をつかむ。

「一体何なの！？アンタは、アタシを辱めるために来たの！？」

「気安くオレに触るな」

額に銃口が当てられる。

ひしひしと伝わってくる殺気。

フッ。これ以上アタシが何かしたらいつでも殺せるってワケね。

オーケー。

ゆっくり手を離す。

「オレがツナに撃ったのはこれだ」

目の前に出された何か。

それは弾だった。

「これは死ぬ気弾と言って、これで脳天を貫かれたものは一度死んでから死ぬ気になって生き返る」

「死ぬ気…？」

「死ぬ気になる内容は、死んだとき後悔したことだ。今回のツナの

場合は『笹川京子に告白する』って言う物だぞ」

…既に頭が容量オーバーしてるわよ？

でも…えっと…要するに…リボンがこの弾をツナに撃って？ツナが京子に告白できないのを後悔して？死ぬ気になってあの姿……？

「なんて納得できるわけないでしょ！」

必殺 卓袱台返しならぬ書類返し。

まとめてあった書類が宙を舞う。

後片付けが大変だから、よい子は真似しないでね★

「死ぬ気弾なんて聞いたことないわ！」

「死ぬ気弾はボンゴレファミリーに伝わる秘弾だ」

「ボンゴレファミリー？」

「オレは、ボンゴレファミリーのボス、ボンゴレ9世の依頼で、お前を立派なマフィアのボスに教育するために日本に来た」

話がむちゃくちゃ過ぎて全くついていけないわ。

死ぬ気弾を撃たれたツナなら、この話を信じるのかしら？

「ボンゴレ9世は高齢ということもあって、ボスの座を10代目に引き渡すつもりだったんだ」

なら、アタシじゃなくても適任者はいるんじゃないのかしら。

「だが、10代目最有力者のエンリコが抗争中に撃たれた。若手？2のマッシーモは沈められ、秘蔵っ子のフェデリコはいつの間にか骨に」

言いながらリボーンは三枚の写真を取り出した。

全てその人たちと思われる死体の写真。

……それって、乙女に見せるもんじゃないわよ。

「それで、10代目候補として残ったのがお前なんだ」

「チョイ待った！話が飛びすぎてるわよ！」

「ボンゴレファミリーの初代ボスは早々に引退し、日本に渡ったんだ。それが市のひいひいひいじいさんだ。つまりお前はボンゴレファミリーの血を引くれっきとしたボス候補なんだ」

「何言ってるのよ」

「アタシ達のご先祖様がマフィアのボス！？」

信じられない。

「それなら、ツナでもよかったんじゃないの？あの子だって同じ血を引いてるはずよ」

「9世はお前を指名してるんだ」

理不尽だ。

恭ちゃん以上に理不尽な話だわ。

「心配しなくてもオレが立派なマフィアのボスにしてやる」

「そーゆー問題じゃなくて！」

「んじゃあ、帰るな。オレはお前がボスになるまでずっと一緒にいるぞ」

それだけ言うと、リボーンはパラシュートに乗って姿を消した。

教室にはアタシと書類と静寂だけが取り残された。

散らばった書類を拾って揃える。

その間にもリボーンの言葉が頭から離れなかった。

『お前はボンゴレファミリーの血を受け継ぐれっきとしたボス候補なんだ』

アタシが、マフィアのボス……。

今までの平穏な日々が音を立てて崩れるのが聞こえた気がした。



「姉さん、ごめん」

家に帰って最初に聞いたのは、ツナのこの言葉だった。

「オレのせいで……」

「話はリボンから聞いたわ。京子に告白したんだって？」

「うん……」

うつむいてしまう弟。

「ツナ」

「えっちょっと姉さん!？」

アタシはツナをそっと抱き寄せた。

「ツナ、昨日アタシが言ったこと覚えてる？」

「うん。人は変われる、でしょ？」

「そう。人は変われる。どんな人だっていつか変わらなければいけない」

「……………」

抱き寄せていたツナを離し、頭に手を乗せた。

「男の子が変わるべきなのは勇気。ツナには勇気が充分に備わってる」

「オレに勇気なんて…」

「それに、女の子は勇気ある人を好くものよ」

「!!」

手を下ろしてリビングに入る。

そして、ツナに背を向ける形でソファに座ると、小さく溜息をついた。

「明日は一騒動ありそうね」

「え?」

「アンタが京子に告白したとなると、一人五月蠅いのがいるのよね」

ツナは意味が分からなかったようで、うーんと考え込んだ。

そして、あっと声を出した。

「もし…かして、持田先輩？」

「ご名答」

そう。あたしのクラスメイトである、剣道部主将・持田。

そいつは自称京子の彼氏なのだ。

あたふめくツナを余所に、アタシは明日どうするかを考えながら部屋に向かった。

「な!？」

アタシの部屋は結構変わっていた。

あちこちにトラップが仕掛けられ、その真ん中（つまりはアタシのベッド）で堂々と寝ているリボン。

「人の部屋で寝るな——っ!」

標的3 VS持田来る！

「いゝちっ」

教室に入るなり、誰かに名前を呼ばれた。

「おっはよ」

次の瞬間、アタシに危険な物が突っ込んできた。

「ほぶっ。いったいなあ、何すんのよ菜摘！」

「へっへん」

その正体はアタシの親友、星風菜摘。

眼鏡っ娘の巨乳ちゃんがトレードマークの彼女は、典型的なお嬢様育ち。

のはずなのに、行動の一つとってもお嬢様とは思えない。

「市。さっきね、持田が綱吉クンに勝負吹っかけに行ったよ」

「やっぱり？」

「どうやら、アタシの予感は的中したようね。」

「それで、剣道勝負するんだって。行こっ」

「ちょっと待ってよ。ツナは剣道は愚か、運動全般ダメなのよ」

「だからこそ見物なんじゃん。ほら早く」

菜摘に手を引かれ、連れられるままに道場へと向かった。

見物って、アンタは人の弟をなんだと思ってるのよ。

道場に着くと、野次で溢れかえっていた。

「ここにいる奴ら全員、恭ちゃんに咬み殺されればいいのに」

しばらくすると、剣道部員に運ばれて、ツナが姿を現した。

「貴様は剣道初心者だからハンデをやる。十分間に一本でもオレから取ることができれば貴様の勝ち、できなければオレの勝ちとする！」

あらまあ、あの外道にしては随分なハンデじゃない。

でも、ツナの運動オンチはそのハンデを持っても埋まるかどうか……。

「商品はもちろん、笹川京子だ!!」

前言撤回。やっぱり外道だわ。

「ツナ! 男ならしっかり勝って見せなさい! 沢田家の人間たる物、勝負に勝って然るべきよ!!」

「姉さん……。それ、プレッシャーにしかない……」

あれ? そうなの?

まったく情けないわね。それでもアタシの弟かしら？

「無駄なことだ沢田市。お前の弟はオレの手によって葬り去ってやる」

「ひいひいっ！」

「外道のあなたにそんなことができるかしら？」

ちょうどその時、道場の天井で何かが光った。

そして次の瞬間。

ズガン

多分、殆どの人が気付いていない銃声。

そして、倒れるツナ。

どうしてリボーンはすぐに死ぬ気弾を撃っちゃうのかしらね。

周りにいる人たちは、何が起こったのかは理解していない。

もちろん菜摘も同じ。

「あ、あれ？ 綱吉くんどうしたの？」

「ま、見ててあげて」

アタシは目を逸らしたいぐらいだけどね。

「復活^{リ・ボーン}！！死ぬ気で一本取る！！」

ツナの死ぬ気タイムが始まった。

「ぶあかの極みだな沢田綱吉！だがオレの勝ちが決まっているのだ
！」

むう。なんだかイラつきますわ。

持田は竹刀を振り下ろし、ツナはパンツ一丁で突っ込んでいく。

なんだかシュールな光景よね。

持田が振り下ろした竹刀がツナの額をうち、誰もが面を取ったと思った。

けれど、ツナの勢いがとまるはずもなく、竹刀を割るに至った。

しかもそれでも勢いは衰えることなく、そのまま持田に頭突きをした。

「ねえ市。あれって本当にアンタの弟？」

「知りません」

そしてツナは、右手を振り上げると、

ブチブチッ

持田の髪バカの毛を引っ抜いた。

一瞬の静寂。

そして笑いの嵐。

「ツナの奴考えたな！」

「確かに何を一本とるかは言っていなかったもんな！」

あちこちから聞こえる声。

言われてみればそうかもしれないわね。

さて、判定の結果は……

「……………」

旗が上がらない。

ま、そりゃあ持田の後輩だもんね。

ツナはどうするのかしら。

いつもならば諦めるけれど、今は死ぬ気だし…。

「これでダメなら！」

そういうと、ツナは持田の髪を全て引っこ抜いた。

見事な坊主頭の出来上がり。

「「なゝむゝ（チーン）」」

見事に菜摘とハモった。

「さて審判さん。これで持田はもう戦えないわ。それでもまだ旗を揚げないというのなら……」

あたしが相手をしてあげてもいいのよ（ニコッ）」

「ひいっ 赤！勝者、沢田綱吉！！」

高々と揚げられたツナの勝利を示す旗。

そして、沸きあがる歓声。

「すげえよツナ！」

「見直したぜ！」

気付けば、ツナは沢山の人に囲まれて、褒め称える言葉をかけられていた。

アタシの肩に誰かの手が乗せられた。

「よかったね、市」

「菜摘……。ええ、そうね」

その後、ツナが京子に声をかけられているのを見て安心したアタシ

達は、そそくさと教室へ戻った。

後ろからリボーンの視線を感じながら。



家へ帰ったアタシを出迎えたのは、盛大な爆発音。

場所はアタシの部屋。

そして、パラシュートで飛んでいくリボーン。

「ちょっと!?! 何やってんのよ」

慌てて部屋に駆け込むと、アタシの部屋はメチャクチャになっていて、黒焦げになったツナが倒れていた。

「もう、人の部屋で何やってんのよ————っ!?!」

夕暮れの空に、アタシの声が虚しく響いた。

標的4 転校生来る！

マフィアのボス———：

それは裏社会に君臨する闇の支配者

何人もの信頼できる部下を片手で動かし

ファミリーのためなら自らの命を張ることも厭わない

彼等の周りには信望と尊敬の念が取り巻き

スラムの少年はヒーローとあがめたる：

「へえ、そうなのか」

「あんたが無理矢理読ませてるんでしょ!!」

今アタシが読んでいたのは、“マフィアのすべて”。

どうしてこんなのを読んでいるのかというと、リボーン曰く、

「毎日読めよ。お前はファミリー10代目ボスになる奴なんだからな」

だそうよ。

まったく、アタシはマフィアのボスになんかならないって言ってるのね」

「心配いらねーぞ。後はこっちで勝手にやるから」

あ、声に出た？

って言うか、勝手に人の心を読まないでほしいわ。



「はあ」

「どうしたの、溜息ばかりついて」

「あうー恭ちゃん聞いてよおー」

「何が？」

恭ちゃんに話してみた。

彼が信じてくれるかどうかは分からないけど、何となく全てを話してみた。

突然現れた赤ん坊、リボーン。

マフィアの次期ボス候補だと言われたアタシ。

何故かツナに使用される死ぬ気弾。

「ねえ」

ずっと黙って話を聞いていた恭ちゃんが口を開いた。

「君、熱でもあるの？」

「狂ってない！アタシはちっとも狂って何かいないわよお！」

「五月蠅い」

「……………はい」

酷いよ恭ちゃん…………。

むーそんなに信じられないことかしら。

紅茶を静かに啜る。

因みに今は応接室にいる。

「獄寺隼人…………」

「はい？」

「今日、君の弟のクラスに獄寺隼人って言う転校生が来たはずだ」

「ふーん。で？」

「彼はイタリアからの帰国子女らしいからね。その赤ん坊もイタリアから来たって言うのが本当なら、その彼に聞いてみるといいよ」

アハハ―馬鹿ですね恭ちゃん。

一般人がどうして殺し屋を知っているのですか。

まさか恭ちゃんがそこまで馬鹿だったなんて思いもしなかったわ。

「今考えていたこと、全部口に言ってみて」

うっっ……。

「ムリ★」

「咬み殺すよ」

「いいやあ――――っ！――！――」

ムリムリムリ！本つつ当にムリだからね！？

こんなじゃ言わなくたって咬み殺されるじゃないの！！？

叫びながら応接室を飛び出す。

廊下にいた人たちが変な目で見てきたけれど、そんな事気にしていない場合じゃないわっ！



「ハア…ハア…。流石の恭ちゃんも…ここまではこないよね…」

走りに走りまくってたどり着いたのは、並中を出て五分走ったところの路地裏。

誰もついてきていないことを確かめて、アタシはその場に座り込んだ。

「目に余るやわさだぜ」

!!?

「誰!？」

驚いて立ち上がる。

振り返ると、道の奥―つまりはアタシがいるところよりも更に路地裏に入り込んだところに立つ一人の少年がいた。

暗くて顔までは分からない。

「並盛中学3―A 沢田市」

「!？ あなた誰？ どうしてアタシの名前を」

知っているのは全校生徒。

「質問を替えるわ。今はまだ学校の時間よ？ どうしてこんな所にい

るのかしら？」

ハッキリ言って人の事いえないのだけれど。

「オレはテメーを10代目だとは認めねえ」

「どうしてそれを…？名乗りなさい少年。そっただけ情報を持っているなんてずるいんじゃないか？」

この人が並中の生徒ならば、名前を聞けば分かるはず。

これでも並中の生徒の名前と顔は全員覚えているのよ。

ま、風紀委員の絶対条件なんだけどね。

「オレは獄寺隼人」

「え！？今日来た転校生！？」

アハハ……彼もマフィアがらみだったのね……。

笑えないわよ。

「10代目にはオレになる。消えな」

彼が取り出したのは……ダイナマイトオオッ!?

チッ。

目の前を何かが通り過ぎ、ダイナマイトの火を消した。

「ちっ」

「早かったな、獄寺」

「な!リボン!!」

ダイナマイトを消したのはリボンだった。

「ちょっとリボン!何でアタシが転校生に命狙われてるの!?」

「アンタが9代目が最も信頼しているって言う殺し屋のリボーンか」

「そーだぞ」

リボーンに話しかける獄寺とやら。

9代目が最も信頼してる…って、リボーンってどんだけすごいのよ。

「っていうか、獄寺はリボーンを知っているの？」

「オレが獄寺こいつを呼んだんだぞ。ま、会うのは初めてだけだな」

あ、そ。

「オレが勝ったら10代目確定って言うのは本当なんだろうな」

……はい？

この人、今なんて――

「本当だぞ」

「待てい！アンタ、あたししか10代目になれないって言ってたわよね？アレは嘘だったのかしら！？」

「ちげーぞ。戦えって言ってんだ」

このガキ……簡単に言ってくれるじゃないの。

ジュッ

アタシとリボンがいがみ合っている間に、獄寺はダイナマイトの着火を済ませてしまった。

「果てな」

「あ……」

死ぬかもしれないって言うときに、ふとあることを思い出した。

「生徒の武器の所持は校則によって認められていません。よって、校則違反として、獄寺隼人、あなたを成敗させていただきます!」

近くの木を折り、その枝で残り僅かとなった導火線を切った。

へえ〜。枝で物って切れるのね。

「ようやくやる気になったか」

「いいえ」

「!?!」

「アタシは風紀委員長補佐としての役割を果たすだけよ」

枝を何本かに折り分けて、短刀のように構えた。

「行くぜ、2倍ボム!」

「させない!」

地面を蹴り、飛んでくる相手の武器の中に突っ込んでいく。

持ち前の運動神経で、一つ一つの確に導火線を切っていく。

「くっ。2倍ボム！」

「同じ技は二度と効かないわよ」

さっきの二倍のスピードでダイナマイトを処理していく。

相手の顔に焦りが見えた。

「さ、3倍ボム——」

「遅い！」

最初に放った分の三倍の量のダイナマイトが彼の手の中にある。

だから“3倍ボム”なのだろう。

だからと言ってアタシにとっては何でもない。

放たれる前に全てを切り捨てる。

「くそっ」

「そ・れ・と。タバコは体に悪いのよ」

最後に彼のタバコを消して、大きく跳躍して背を向ける形で着地した。

背後で、成す術をなくした獄寺が崩れ落ちる音がした。

傍から見たら特撮ヒーローのワンシーンね。ヒーローが敵を倒して、背後でドガアンみたいな。

「御見逸れました!」

「へ?」

ビクビクして振り返る。

獄寺が土下座をしていた。

「オレが10代目になろうなんてこれっぽっちも思っていない。ただ、候補が女性だと知って気になったんです。しかしあなたは、オレの予想をはるかに超え、強く優しかった」

今の流れに優しい部分を見つけた人手を挙げて。

ふむ。いない。

「アタシはただ、風紀委員としての役割を果たしただけよ」

「一生ついていきます！」

話を聞け！

「よかったじゃねーか。部下第一号だな」

「あのねえ！」

冗談じゃないわよ！

部下だなんて余計にマフィアっぽくなってるし！！

アタシはボスにはならないって言ってるのに……。



「えっあれっっ！？ご、獄寺君！？」

「なっ沢田って10代目の弟！？」

顔を合わせるなり驚きまくる二人。

そういえば、この二人は同じクラスだったわね。

今はアタシの家にいる。

リボーンの命令によって隼人君を家に連れてくることになった。

「あー、同じクラスなら紹介はいらない…カナ？」

「何言ってるんだ。ボスならファミリーの紹介ぐらいしやがれ」

銃が向けられる。

「アタシはボスじゃないし、ファミリーなんていらぬ。隼人君だ
って友達の方がいいとー」

ズキュウン

「ひいっ!」

情けないわよツナ。男の子がそんな声出すもんじゃないわ。

とか言いつつも、アタシも足がすくんでいた。

だって…だって、銃弾がアタシの顔の一ミリ横を通って行ったのよ！？

これが平気な人っている！？

「わかったわよ！やるから！やるから銃を下ろしてちょうだい！！」

「ちっ」

舌打ち！？

今舌打ちが聞こえたよ！？

「え…とツナ、こっちは獄寺隼人君。なんて言うのかしら、ともだち「部下だ」…はい、部下ね。それで隼人君、こっちはアタシの弟の綱吉。運動や勉強は人より劣るかもしれないけど、優しい心や勇氣は誰にも負けないわ」

「ちょ…姉さんてば……」

紹介が終わると、ツナは顔を赤らめて俯いてしまった。

ん？本当のことしか言っていないけど？

そんな時、台所から母さんが顔をのぞかせた。

「獄寺君、よかったら夕食食べていかない？」

「！ いいんですか？オレなんかお邪魔しても…」

「母さんがいいって言えばいいのよ。食べて行きなさい、隼人君」

「10代目がそう仰るならご馳走になります」

ツナやリボンも承諾し、その日の夕食は賑やかな物となった。

ま、マフィアはイヤだけど、こういうのは有りかもね。

標的5 天然野球少年来る！

「市、ちょっといいかい？」

「どーしたの？ 恭ちゃん」

突然呼ばれて恭ちゃんのところへ行くと、手渡されたのは一枚の紙。

それは野球部の一人ひとりの最近の成績をまとめた書類のうちの一枚。

「彼、どう思う？」

「武君かぁ。そうねえ、成績が右肩下がりにゃない」

一年にして野球部エースの山本武。

ツナのクラスメイトで彼の数少ない親友の一人でもある。

そんな武君の最近の成績はガタ落ちだった。

「このままだとスタメン落ちね……って何でアタシに聞くの？」

「君の弟、彼と同じクラスなんでしょ？だから、彼に絶対に落ちないように言っておいてくれる？」

えゝメンドくさゝい。

自分で言えばいいじゃないのゝ。

「じゃないと咬み殺すから」

「任務はしっかり遂行します！」

「…そう」

脅迫してるくせに何でそんな哀れみの目で見てくるのかしら。

それとも、脅迫してるって言う自覚がなかったり？



「と、言うことなのよ」

「ええ!？」

アタシから言うのも難だから、ツナに伝言を頼みに1-Aに出向いた。

来るなら自分で言えばいいのに、と呆れられたけどね。

「風紀委員に言われたら武君にプレッシャーかけちゃうでしょ？」

折角のツナの親友なんだし応援でもしてあげて？

ね? いいでしょ? 姉さんの頼み」

とびっきりの笑顔で願う。

こうすると、ツナは絶対に頼みごとを聞いてくれる。

小さい頃はかわいい笑顔で答えてくれたのに、最近は何故かツナの顔が引きつってるのが気になるのだけど。

「じゃ、お願いね？」

「ちょっと待って！」

「ん〜？」

呼び止められて立ち止まる。

「あの…さ。最近獄寺君が学校に着てないんだけど…」

ああ。隼人君のことね。

「隼人君なら、ダイナマイトの仕入れに行くなって言ってたから、一週間くらいは学校に来ないわ」

あの日から少したった時、リボーンに聞いた話は驚きだった。

隼人君はイタリアでは少し有名な悪ガキで、通り名まである。

タバコを吸いダイナマイトを扱うことから、『スモークン・ボム・隼人』と呼ばれ、

しかも体のいたるところにダイナマイトを隠し持っているらしい。

そして今、そのダイナマイトが切れてしまい、今朝仕入れに行ってくるとメールが入っていた。

「……獄寺君もマフィア関係だったの……？」

「らしいわね。とにかく頼んだわよ」

心から残念そうな顔をしているツナを置いて、アタシは1-Aの教室を後にした。



次の日、あたしは重いマットを運んでいた。

「お…重い…」

理由は、体育委員会が準備をサボったから。

体育の授業で使う大きなマットを半ば引きずるようにして運ぶ。

もうっ誰か手伝ってくれればいいのに。

菜摘とか菜摘とか菜摘とか。

つまりは菜摘に手伝ってもらいたいよ。

あの子、ああ見えて力持ちだから。

あまりの重さに疲れ果て、マットの上に転がってフカフカと堪能しているときだった。

「きゃああっ！」

悲鳴！？

声のしたほうを見ると、場所は屋上。

そして落ちてくる二つの影。

って飛び降り自殺！？

させるかつ風紀が乱れる！

「風紀を乱すものはあ…何人たりともお…成敗ッ！！」

大して離れていないから急げば間に合う。

そう思ってマットをつかんで走り出した。

「武君、ツナ！？」

あろうことか、その二人は弟とその親友。

的確にマットを置き、ツナに向かって叫んだ。

「ここよツナ！このマットに飛び込みなさい！」

ツナは言葉通りに、武君をつかんでマットの上に落ちた。

一瞬しか見えなかったけど、死ぬ気モードだったわね。。。

「いつつつ…あ…ありがとう、姉さん」

「悪かったなツナ。やっぱりバカがふさぐとロクなことがないってな」

「まったく…。飛び降りなんて何を考えてるのよ」

話を聞くと、昨日練習のしすぎで骨折をした武君は、野球ができないなら死んだ方がましだと考えたらしい。

「生きていたからいいものの、今後は二度とこんなことをしないでね？」

「ああ。ツナのおかげで頑張ろうって気になれたしな」

「そう。それはよかったわ。でも今は今でバツを与えないとね」

その一言でツナと武君の笑顔が固まった。

ツナは何回か口をパクパクして、ようやく声を出した。

「ば…バツって…ヒバリさんみたいに咬み殺されるの…？」

「？ あ、あははっ違うわよ。このマットを運ぶのを手伝ってもらうだけよ」

そういうと、ツナと武君の目が点になった。

「え？ マットを？」

でもさっき姉さん、一人で運んでたよね？」

そーなのよね。

無我夢中だったから気にしなかったけど、このマット、一人で持ち上げちゃったのよね。

「でも今はもてないわ♪きつとあれよ…えーっと鍛冶場の馬鹿力的な？」

「な！！？」

「ははっツナのねーちゃんって面白いのな。まあ、女で一つでってのも大変だし、オレも悪かったから手伝うぜ」

「ありがとう武君」

三人で持つと、一人のときよりずっと軽かった。

ツナがフラフラで危険だったけど、その分武君が支えてくれたおかげで何とか授業に間に合った。

教室に行くと、何故か菜摘が笑っていた。

……なんで？



「おい、市」

「なに？リボーン」

「山本武をファミリーに入れるぞ」

「はい!？」

突然何を言い出すのかと思いきや…まさかのファミリー勧誘のはなしだなんて……。

「それとだ。お前がマツトを持ち上げられたのは鍛冶場の馬鹿力な
んかじゃないぞ」

……はい？

「あれは、お前にボスの資質があるからだぞ」

「すぐにボスにつなげないのっ」

「本当だぞ」

あーもう五月蠅い五月蠅い。

マフィアと関わりを持つとろくなことないわよ。

こんなくだらないことにツナとかツナの友達を巻き込みたくないっ
ての。

「変に皆を巻き込まないでね！」

はあ。

武君になんて説明しよう。。。

標的5 天然野球少年来る！（後書き）

はい、真菜です。

『もう一つの天空』ご愛読ありがとうございます。

お知らせです。

これからは週に一回の投稿になります。

「今まで週一じゃなかったじゃん！」

と、思う人もいるかと思いますが、それには色々と事情がありまして。

標的3までの話は、本当は標的1に収める予定だったのですが、あまりに長いので三分割しちゃいました。てへぺろ★↑キモイわ

なのでその3話は実質1話。

つーことで、これからは週一となります！

標的6 泣き虫ランボ来る！

「答えは？」

「さ…3？」

「はい没収」

「ああ！オレの漫画！！」

「約束よ？」

今、あたしはツナに勉強を教えている。

いわば家庭教師中。

答えを間違えたらツナのコレクション（漫画やCD）を没収すると言う、極めて簡単な方法。

「もー……えゝ！？」

「な、何よ？」

「姉さん…アレ…」

ツナが外を指す。

その示す方向を追っていくと…

「な！？」

そこには牛柄の服を着た謎の子供がいた。

今更ながらに、アタシやツナの部屋は二階。

今はツナの部屋で勉強していて、ベランダがあるのはアタシの部屋だけ。

その窓の向こうにその仔牛はいた。

まあ、つまりは木の上にいるってことなのだけど。

「死^ちね、リボーン！」

どうやら狙いはアタシの隣で寝るリボーンらしい。

「わ！ちよっ 姉さんどーするの！？」

「どうする…って…リボーンを起こすしかないんじゃないの？」

「えゝゝゝ——っ！？無理無理！！殺されるって！！」

無理だといわれても起こすしか手がないのに、他にどうしろって言うのよ。

それこそアタシがヘルプを出しちゃうわよ？

「うぐ…ひっく…」

泣き声が聞こえて声の主を見ると、さっきの仔牛が泣いていた。

アタシが理解する限りだと、

リボーンが寝る＝相手を無視する

となる。

つまりは、あの仔牛は無視されたショックで泣いているのね。

メリメリメリッ

バキッ

「ぐぴゃっ」

「「!!?」」

突然仔牛が消えた。

否、落ちたわ。

これは絶対に関わらない方がいいわね。

……よし。

「ね…姉さん？」

「勉強再開」

「え————っ!!?」

これは不可抗力よ。

うん、そう、不可抗力。

ピポピポピポピポ

……うるさいわね。

ガチャッ

「あら？」

「よおりボーン！オレっちだよ！ランボだよ！」

さっきの仔牛来たあ！？

まさかの展開！？

入ってきた仔牛はリボーンのところへ行くと、眠っているリボーンを叩きだした。

あーあー自殺行為よ。

「うぜえ」

結局、目が覚めたりボーンの手によって、その仔牛は壁に叩きつけられた。

「おーいて…何かに躓いちまった…」

え？躓いた？しかも何かって…。

明らかに自業自得でリボーンに飛ばされてたわよね？

「イタリアから来たボヴィーノファミリーのランボさんは躓いちまった！好物はブドウと飴玉でリボーンを殺しに来たランボさん5歳は躓いちまった！！」

「泣きながら自己紹介してる――！！？」

どうしよう…これは一体どうすればいいの！？

やっぱりここは…

「勉強勉強」

「いいの！？」

「ツナも勉強に集中して」

極力仔牛を目に入れないようにして勉強を再開する。

泣き声なんて聞こえない！

聞こえないんだからああ！！

「ね…姉さんが…壊れてきた…」

ガシッ

「壊れてないわ。断じて壊れてないわよ？マフィア云々に関わりを持ちたくないだけよ。いいわねツー君？」↑恐怖の笑顔

「は…はい…」

一瞬のツナside

どどどどうしよう！！

変な牛が突然現れたと思ったら姉さんがおかしくなっちゃったよ！

って言うかあの笑顔ホントに怖いから！

リボーンもずっと寝てるしで…あーもー!!

オレはどーしたらいいんだよ!!

side out

ドガアンツ

え？今の音の説明？

ヤダ。面倒なもの。

えーと、言うなれば…

無視された仔牛が頑張ってリボーンの注意を引こうとする

←

それでもなおリボーンは寝続ける

←

キレた仔牛が手榴弾を投げる

←

一瞬にしておきたりボーンがレオンでうちわを作る

←

打ち返した手榴弾が仔牛に命中

←

「ぐぴゃあああゝゝゝ!!」

←

ドガアンッ

となるのよ。

「姉さん…それは省略しすぎだと思うよ…」

「あら、そう？でもこれで勉強に集中できるはずよ。結果オーライね」

「市の言うとおりだぞ。お前は勉強に集中しやがれツナ」

ゲスッ

「ぶっ」

アハハ。まさか蹴りを入れるなんて。アハハ。

「イツちゃん、ちょっといいかしら」

「ん。ツナ、アタシはちよつと席をはずすわ。リボーン、少しの間ツナの勉強見てあげて？」

「うん」

「わかったぞ」

部屋を出て下に下りる。

そこでアタシを待っていたのは母さんとさっきの仔牛だった。

仔牛はもちろんボロボロで泣いていた。

「この子、リボーン君のお友達でしょ？ケンカしちゃった？」

母さん。アレはケンカと言うレベルの話じゃないわ。

「市は一番年上なんだし、二人の仲裁に入ってあげて」

「却下よ。アタシはツナの家庭教師で忙しいのよ。それにケンカなんてリボーンたちの問題で——」

「じゃ、母さんは夕食の準備をしてるわね」

そう言い残すと、母さんは台所へと姿を消した。

人の話を聞けええ！！！

「えーと、ランボ…だっけ？リボーンとこ行く？」

「やあああああああ！！」

どうやらリボーンは、仔牛に相当な恐怖を植え付けたいらしい。

恐るべし、リボーン。

さてどうしようかしら。

このまま部屋に戻ってもさっきの状態に逆戻りだろうし、リボーンもうるさいだろうし…

「外に行くのでしょうか」



何時間くらいこうしているのから。

高い位置にあった太陽も大きく傾いて、空は紅く染まり始めていた。

それでもアタシは帰れなかった。

「ぐず…ヒク…」

ランボのせいで。

はあ、そろそろ帰りたいわ。

「10代目」

お、この声は。

「隼人君じゃない。帰ってきたのね」

「はい。ついさっき帰ってきたんで、10代目の家に挨拶に行こうとしていたところっス」

うん。でも一週間の約束が一ヶ月近くになってるわよ？

「それより何スかその牛ガキ」

「それがね…」

（事情説明中）

「リボンさんを？　ったく、10代目の手を煩わせてんじゃねえ」

隼人君。君は物分りがいいし頭の回転も速いけど、短気なのがキズだということに気付いてね？

「ほらランボ。帰るわよ」

「やああああ!!」

「あのねえ、早くしないとご飯が——」

「(ピタ)」

止まった!?

ご飯って言うワード出ただけで泣き止んだ!?

隼人君も固まってるし。。

「あ、隼人君もご飯食べに来る?」

「え、いいんスカ?」

「もちろんよ」

その本音がランボの処理を押し付けたいがため、なんていうのは口が裂けても言えない。

ランボが泣き止んでくれたおかげで、さっさと家に帰ることができた。

後に、母さんが隼人君のことを歓迎してくれたことや、リボンとランボのどつき合いがあったことは言うまでもない。

アタシとツナは、ただただマフィアとはかけ離れた平和な日々を願うのみ。

標的7 10年バズーカ来る！

「イツちゃん、ツツ君、リボーン君。ご飯できたわよ」

やっとかあゝ。お腹ペコペコだよ。

ダイニングに入ると、既にリボーンとツナとランボがいた。

…ん？何でランボ？

「母さん、何でランボがいるの？それになんでツナはノートツツコミなのかしら？」

「やあねえイツちゃん。ランボ君なら昨日から家にいるじゃない」

言われてみればそのよゝな気がしなくもないわね。

「それじゃ、回さなくちゃいけない回覧板があるから、ちょっと出かけてくるわね」

「ちょい待てい！」

ボタン

ちっ。逃げられたか。

「……………」

「……………」

「……………（モグモグ）」

「……………（ゴクリ）」

上からツナ、アタシ、リボーン（食事中）、ランボ（ナイフを持ってリボーンを凝視中）。

空気は悪いしランボは危険なこと考えてそうだしツナはあたしにヘルプの視線を送ってくるし……

ムリ————っ。

「死^ちねりボーン！」

ビュツ ランボがナイフを投げる

キイイン リボーンがそれをお皿ではじく

グサツ はじかれたそれがランボに刺さる

「ぐぴゃっ」

学習しなさいよランボ。

「が・ま・うわあああん！！！」

と、泣き出したランボがモジャ頭の中から紫色の物体を取り出した。

えーとえーと…バズーカ？

ランボはそれを自分に向けて、

カチッ ドン

撃った。

「ええ！？自分に！？」

部屋中に広がる煙。

「ケホッケホッ。何よこれ～～～～」

「ふう～」

「「！！？」」

煙の中から男の声。

…誰？

煙が晴れると、そこにはアタシと同じくらいの歳の男子がいた。

…誰？

「初めまして、若きボンゴレ」

「…誰？」

「10年前の自分がお世話になってます。泣き虫だったランボです」

ラ・ン・ボ？

「ええええええ！！？」

面影が0。本当にこれがあのランボなの！？

「オレが撃ったのは10年バズーカといいます」

「10年バズーカ？」

ランボがアタシ達に説明したのは次の通り。

10年バズーカとは、被弾者を10年後と入れ替えることのできる、ボヴィーノファミリーに伝わる武器。

入れ替わっていられる時間は5分間。

「へえ」

「世の中には面白い物があるのね」

感心するアタシ達とは反対に、ご飯を食べ続けるリボーン。

「よおりボーン。見違えただろ」

「（モグモグモグ）」

それでもなお無視。^{スルー}

それがランボをキレさせた。

「いいだろう。この10年でオレがどれほど変わったか見せてやる。」

サンダーセット」

掛け声とともに角を装着するランボ。

次の瞬間、雷が落ち、ランボの角が電気を帯びた。

「オレの角は100万Vだ」

「うそー!？」

「いくぜ、エレクトリコ・コルナータ電撃角!!!!」

サクツ リボーンがフォークでランボを刺す

……ごしゅーしょーサマ。

「が・ま……うわああああん！」

「10年経っても泣き虫ですかー!？」

泣きながらダイニングを飛び出していったランボ。

その直後に玄関が開く音がした。

「こら市！」

アタシですか！？

ってか母さん！？

「二人の仲裁に入ってあげてって言ったでしょ！」

そこには仔牛に戻ったランボがいた。

……5分たったのね。

「ランボ君は、リボン君と仲良くなりたかったんだって」

「へ？ そうなの？」

なあんだ、素直じゃないのね。

それならそうと言ってくれれば、いくらでもアタシが仲立ちしてあげるのに。

「なんてね、死ね^ちりボン！」

ドシュッ

と思っているのは嘘中の嘘。

子供の嘘なんて、いくらでも見破れるわよ。

「うぜえ」

ガキイン

リボンに向かって放たれた手榴弾は、いつもの如くはじかれてラ
ンボに命中^{ヒット}。

「ぐぴゃああああ！！！」

ランボはそのまま外へと飛ばされていった。

アタシ・ツナ・母さんは啞然。

そしてリボーンは、

「ママン、おかわり」

のんきだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9092y/>

もう一つの大空

2011年12月16日18時02分発行